



峯みねのたより

私たちのお寺、長泉寺の会報誌。

新装刊

003号

2007年12月16日発行

〒981-1505
宮城県角田市角田長泉寺69番地
電話 0224 (62) 1004
F A X 0224 (63) 0063
<http://www1.odn.ne.jp/chosenji/>

曹洞宗 長泉寺
六国峯

国際環境規格 ISO-14001 認証取得のお寺

感謝を込めた読経が新本堂の隅々まで響き亘り、
この秋、めでたく棟札奉納の儀が執り行われました。



昨年の上棟式で使用された木槌なども棟札とともに新本堂に奉納されました。

ご本堂の落慶に一步近づいたと喜ぶ私たちの心が通じ、佛天のご加護の下、明るい秋晴れの十月二十五日、長泉寺新本堂棟札奉納式が行われました。

新本堂の堂内に初めてご列席いただいた檀信徒役員の皆様方が見守る中、司会の責任役員・三文字正彦様が開会を宣言され、ミネ幼稚園の年長児たちが合唱する「ののさまのうた」で讃佛が行われました。続いて「お経を読むの」の皆様とともに読経が行われ、この日を迎えられた感謝の心が、香り高いお香とともに新本堂の隅々まで響き亘りました。

読経と回向の後、鶴工舎・舎主の小川三夫様からご臨席の皆様へ棟札奉納についての意義のお話があり、旧本堂に奉納されていた棟札と今回奉納される新本堂の棟札が公開され、解説されました。いよいよ鶴工舎の職人が屋根裏に上がり棟札が納められると、その場にいる人の心がひとつになって静かな感動に満たされ、全員が感慨無量の



棟札とは、建物の施主名や大工名・関係者名・由緒などを記したものです。この日奉納された新本堂の棟札は、長泉寺の長い歴史を物語る旧本堂の棟札とともに、私たちの心を遙かな未来へ伝えて行くでしょう。

面持ちのようでした。

本堂再建委員長の鎌田稔様より「皆様にご協力いただいた新本堂も、こんなに立派にでき上がりつつございます」という感謝と喜びのご挨拶をいただき、長泉寺住職からも「この素晴らしい建物に恥じることのないよう、私も初心に返りご本山に入って修行をし、多くの人を集っていただける素晴らしいお寺にしていくことで、皆様にご恩返しをさせていただきたい」と、ご挨拶を申し上げます。

その後は、小川三夫様と作家の塩野米松先生との対談（次ページで紹介）で新本堂建設の貴重なエピソードを拝聴し、落慶への期待感をさらに高めながら、「これからも心をしっかりとって精進していきたい」という責任役員・葉坂恒夫様の言葉によって、棟札奉納式はめでたく御披良喜となりました。

長泉寺新本堂

棟札奉納式

記念対談

【座談会形式】

◆ 小川 三夫様 鶴工舎・舎主

◆ 塩野 米松様 作家「木のいのち木のこころ」著者

◆ 鎌田 稔様 本堂再建委員長

◆ 三文字 正彦様 長泉寺責任役員（司会進行）

三文字 本日は、お二人の先生方を招きし、新本堂建設に関するエピソードなどをお話しいたごきます。よろしくお願ひいたします。

小川 この仕事をさせていただき、本当にありがとうございます。弟子達も仕事に自信を持てたと思います。

塩野 日本の文化を伝承していく宮大工さんは、こういう現場がなければ技を引き継ぐことができません。今回の仕事によって、また新しく良い職人が育つでしょう。ところで、鶴工舎は三十周年を迎えられましたね。

小川 そうです。自分は三十周年でちょうど六十歳になり、鶴工舎を相談役として退きました。ですからこの建物は、自分が鶴工舎で三十年間、宮大工としては四十年ほどやってきた仕事の集大成だと思ひますね。

塩野 本堂の設計にあたっては、さまざまなお考えがあつたと思ひます。

小川 まず地震に強いことですね。また、曹洞宗のお寺なので質実剛健にしようと考えました。それでいて、純粹な曹洞宗のお堂というよりも、畳を入

れ天井を張り建具を入れるなど、皆様の使いやすいお堂となるよう造りました。それから庭がすごく良かったので、庭を眺められるように、縁を大きくするといふ工夫もしました。

塩野 これだけ大きな建物は、鶴工舎の仕事でも稀ですよ。

小川 三十年間で八十から九十ほどの堂宇を造りましたが、大きさでは二番目になりますね。これだけ大きい本堂は少ないですね。

塩野 設計では、この本堂の大きさに見合つた建物の形をお考えになったと思ひます。今までに造られたものよりも、屋根の反りをやさしく緩やかにして美しい線を持たせていますね。

小川 正面から見て、本堂が羽ばたくような軽い感じに反りを出したつもりです。軽いと言っても、屋根に載っている瓦の重さは百五十トンくらいあります。瓦が葺き上がると軒の反りがぐつと下がります。そのときに隅だけが下がるのではなく、この本堂のように全体的にふわつと下がっていれば、建築としては成功なのです。

塩野 日本は中国からこういう建物の建築法を教わりましたが、日本は非常に雨が多く建物が傷みやすいため、深い軒を出すようになりました。法隆寺の五重塔や本堂を見てもわかるように非常に深い。この深さを出すほど、建築としては難しいわけですね。

小川 そうですね。千三百年くらい前にその技術を受けましたが、鶴呑みにはせず、日本人は日本の風土に合わせた建築様式を考えたんですね。

塩野 軒が作る影は建物に落ち着きを与え、入つた人の心をやわらかくしてくれます。軒が短く、明るい姿が丸見えになるのはまるで違い、心の抛り所となるような、影の使い方がうまい建物になりました。鎌田さんは、どういふ感想を持たれましたか。

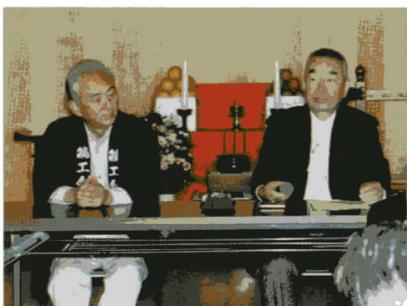
鎌田 こういう立派な建物を造つていただき、造ることも大変なのですが、それ以上に大変なのがこれからの活用ではないかと思ひます。檀家の方々があまり遠慮しないで集い、頻繁に訪れてご指導いただけるようなお堂にしていきたいと思ひます。

塩野 建物というのは、覚悟がいるものだと思います。庭も同じで、庭師さんたちも「できあがつた状態が完成じゃない。ここから先は、お施主様が育てていくことで時代が繋がる。その

ための覚悟を建てたのだ」と言ひます。ですから、このあと建物をどう育てていくか、今度は皆様の仕事になるのです。これからこの建物は長い時間を経ていくわけですが、材料には何年くらいの木が使われたのでしょうか。

小川 柱には奈良の「吉野檜」という檜を使つております。拭けば拭くほど油が出るという特徴がある木ですね。油が外に出よう出ようとする力があり、雨に当たつても弾き返します。これが樹齢二百年くらい。柱の上の方にある軒を支えている木には樹齢千年くらいの力ナダの檜を使ひました。年輪が細かく、大きくなるまでに相当な時間がかかる木で、とても水に強いですね。この建物は、悪くなるところがほとんどないです。瓦も強い。この屋根を葺いた瓦屋さんに、ご住職が「地震で瓦がずれることはないですか」と訊ねると「逆さにしたつて一枚も落ちない」と自信を持って答えていました。

塩野 西岡常一棟梁は「千年の木を使つたら千年保つ建物を造らなければ宮大工ではない」と言われましたが、



数百年ごとに解体・修理を行って、いけば千年は保つということでしょうか。

小川 千年は大丈夫です。

塩野 宮大工さんたちの話しには、五百年とか千年という言葉があたりまえのように出ます。今生きている私たちが誰もそれを確かめようがないけれど、千年前に建てられた法隆寺や薬師寺が実際にそのままの形で残っていて、その技を使っているということなんです。今、瓦の話が出ましたが、新本堂の瓦を葺いたのは、日本一の瓦屋さんです。先日は、唐招提寺の屋根に鎌倉時代の鴟尾^{しび}を復元し、現在は本願寺の屋根を葺いている方です。立派な屋根がなければ、雨が多い日本では法隆寺や薬師寺のように千年以上保ちません。

小川 宮大工の力だけでは、こういう建物は建たないですね。基礎を造つてもらい、屋根を葺いてもらい、壁の漆喰も奈良の職人によつてもらった。それぞれ素晴らしい技術を持った皆さんが力を合わせて造らなければ、千年保つような建物はできないでしょうな。

塩野 瓦といえば、割れやすく「空手家がいつぱい



日本の文化を受け継ぐ匠たちの、技と知恵が集まった「千年の新本堂」。

に十枚も割る」という印象があります。が、もし、この瓦を割ろうとしたら腕が折れるでしょうか？

小川 この瓦屋さんの息子は有名な格闘家と同級生で、学生の時に「おまえの家の瓦を持ってこい」と言われて渡したところ、とても割れなかったそうです。なぜなら、瓦の焼き方から違うんですね。普通は八百度くらいで焼きますが、この瓦は千三百度くらいで温度を上げます。通常だと一日で焼くところを三日三晩で焼き上げます。それだけの暇をかけてあるのです。

塩野 薬師寺などでは、柱に槍^{やり}鉋^{かん}という道具でさざ波のような模様を削り上げてあります。綺麗な刃物で切ると細胞が美しく切れて水を弾くので木が長く保つのですが、この瓦も同様に仕上げの段階で一枚ずつ丁寧に磨きをかけてあり、大量生産の瓦とはまるで違います。裏のお山に登って、ぜひ上から屋根を見てください。瓦の美しい流れとリズムが、緻密に計算されていることがよくわかります。瓦屋さんも「自分の最高の仕事だから見てくれよ」とおっしゃっています。

小川 ここは本当に運のいい建物です。
塩野 さらに、法隆寺などが長く保つ

てきたもうひとつの理由として、壁の丈夫さもありますね。

小川 法隆寺の漆喰は竹の木舞^{こま}を編んで土を付けて造っていますが、この壁は地震に強くするため、細い木を一センチほどの間隔で貼り、漆喰を直接に絡ませる木摺^{きずり}りという方法で造りました。壁の細部に渡る技術は、奈良の職人に来てやつてもらいました。

塩野 左官屋さんは、鳩工舎の木摺りを見て「こんな見事な木摺りは見たことがない。隅から隅まできちっと仕事が入っている。自分たち左官屋も手を抜くことはできない」と言っていました。もちろん初めから手を抜くつもりはなかったでしょうが、職人は互いの力量を見合いながら恥ずかしくない仕事をするように考えます。壁を塗った後、釘の先に麻ひもが付いたトンボというものを打ち込んで強度を高めるのですが、そのトンボの数も麻ひもの長さもすべて途中で変更したそうで、「鳩工舎に決して負けない仕事をした」と言っていましたよ。

小川 それはありがとうございますね。

塩野 こうして、丈夫でいい建物が造られていくんですね。ご本尊が安置される場所の壁は、漆喰塗りではなく和

紙が張られていますね。
小川 襖^{ふすま}と同じような造りで、紙が湿気を吸収して調節するため、仏様が傷まないですね。

塩野 日本ほど紙の技術が発達してきた国はありません。日本に昔からある和紙は、少なくとも千年は保ちます。そういう和紙を集めてきて、一番下には縦目の紙を貼り、次は横目の紙を貼り、それを五、六回繰り返しています。表具屋さんは「二百年、三百年経った頃に、剥がれることはあるかもしれない。しかし紙はまだ保つので、それを貼り直すことができる」と言っています。こういう建物には、日本の文化が長年積み重ねてきたさまざまな技術が集まっている。膨大な人たちの力と知恵の蓄積によって、ここまででき上がっているわけですね。

三文字 立派なお堂を、日本を代表するプロフェッショナルの方々によっていただきまして、感謝の一言に尽きます。これから私たち檀家が積極的に集い、信仰の力によって、後世にいつまでも残るような本堂にしていきたいと思えます。本日は貴重なお話を、どうもありがとうございます。

※対談記録から抜粋して構成、敬称略



五十三歳の手習い

鶴が大きく翼を広げたように気高く、美しく、優しい姿の本堂ができてつづあります。檀信徒の皆様方とともに、この大事業の無事円成なることを祈りたいと思います。

さて、職人さん達は毎夜遅くまでカシラの刃を研いでいました。然もその姿はみな喜々として、大変な感動を覚えしました。この姿を見て、私ももっと自分自身を磨く修行を積み重ねばならな

お知らせ

きたる平成二十年九月十八日(木)、いよいよ私たちの新本堂が落慶の日を迎えることになりました！

落慶式前後の九月十六〜十九日は、準備等のため法要のお申し込みができませんのでご注意ください。新本堂での法要は、九月二十日の彼岸入りより行うことができます。

なお、新しいご本堂はぜひ慶事から

いと発奮したのでした。「本堂だけが立派に出来上がったても中身の無いガラシン堂では笑われる」と思っていたからです。そこで九月より、師家養成所として、教師資格を有する僧侶を養成する修行機関に入り、一年間に九十日それを四年。大本山永平寺や總持寺の若い修行僧に混じって坐禅を中心とした修行生活を送ることに致しました。本山では毎朝三時半起床、九時就寝の生活です。正直、どこまで続けられるか自信がありませんが、何卒、ご理解をお願いしたいと思います。

修行の糧を今後の長泉寺の運営に反映させ、檀信徒の皆様方に振り向けることができれば嬉しいと念願しております。留守中、くれぐれもよろしくお願ひ致します。

スタートしたいと考え、落慶式の間行われる九月に新本堂で結婚式をお申し込みの先着一組様へ、特典として式費用を無料とし、さらに新婚旅行費用として三十万円をプレゼントする予定です。来年、ご結婚を予定されている皆様は、どうぞご検討を。

他にも、落慶のお祝いにさまざまなイベントを企画中です。前夜祭には、あつと驚く豪華なゲストが登場するかもしれません。お楽しみに！

ご応募をいただいた読者の方から抽選で30名様にプレゼント!!

長泉寺新本堂再建用材を使用し、製作した記念の表札板を、抽選で三十名様にプレゼントします。

前ページの対談記事でご紹介しましたように、私たちの新本堂には樹齢千年以上にもなるカナダの檜ひのきが使われています。

厳しい風雪を耐え抜いて大きく育ったカナダ檜は、木肌が美しく、水を弾いて腐りにくく、白アリもつきにくいという特性を持ち、「薬師寺金堂」再建にも用いられました。まさに、千年先までを視野に入れた新本堂再建にふさわしい、



誇り高き大樹と言えるでしょう。このカナダ檜に職人さんたちの手で丁寧にカンナがけしていただき、長泉寺の刻印を入れた表札は、新本堂の分身のようなもの。皆様方の益々のご繁栄を願ひ、一つひとつにご祈禱も行いました。

どうぞ、末永くお使いください。

ご応募の締切は一ヶ月末日まで！

住職のすゝめ「罪」の冊

『異評 司馬遼太郎』

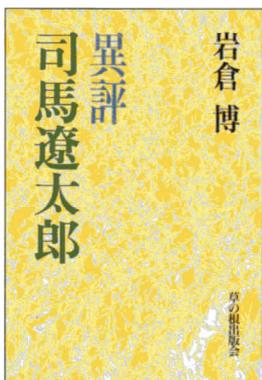
岩倉博・著

角田市出身で長泉寺の檀信徒でもある著者は、業務の傍ら個人でミニ冊子を発行し、精力的な文筆活動を続けている方です。長年にわたる研究・執筆の成果を単行本にまとめた本書では、大衆意識に対する歴史小説の影響について鋭い批評が行われています。

司馬遼太郎といえば「国民的人気作家」ともいえる大作家ですが、司馬作品の「功」は多く語られるのに「罪」を論じられることはほとんどありません

でした。そこに危機感を抱いた著者は、司馬作品の歴史観には不十分性があり、もっと功罪両面で論じる必要があると提言しています。

何ごとも偏った視点だけでは正しい判断はできません。不安定な国際情勢の中、右傾化が進みつつある日本の現在を見つめなおす良いきっかけになる本だと思えます。



発行：草の根出版会
定価：本体 2,000 円＋税